

教職大学院 Newsletter

No.181

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.4.15(公開版)

変動する世界とエージェンシー

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科
研究科長・教授 木村 優

新しいミレニアム(千年紀)を迎えてはやくも23年の歳月が流れました。21世紀はもう四半世紀にまで到達しようとしています。この23年間、わたしたちは実にスピーディーな社会変化を体験してきました。

地球規模のグローバリゼーションが20世紀に比べて飛躍的に進展したことで、国際的な人・物の移動が爆発的に増加しました。その結果、世界中の多様な人々と文化が私たちの身近な暮らしに結びつくようになりました。AIやロボティクスをはじめとした新しいテクノロジーの進化はすさまじく、わたしたちの暮らしは日ごと便利になってきています。多様な人々のかかわりと協力が、新しい価値と技術の創造を社会にもたらしたのです。そうした新しい価値と技術の創造が、よりよい未来に向けた希望の光をわたしたちにもたらしています。

しかし、新しいミレニアムは実に多くの不安の影も落としてきました。始まりの年、2001年9月11日にアメリカを襲った悲劇は、わたしたちに長いテロとの闘いを課し続けています。2008年9月15日、国際的な投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻は地球規模の金融危機をもたらし、多くの失業者を街にあふれさせました。2011年3月11日に東日本を襲った巨大地震は大津波を引き起こし、原子力発電所のメルトダウンを引き起こすという未曾

有の大災害となりました。2019年末から世界中で猛威をふるい続けた新型コロナウイルス感染症パンデミックは、現在まで世界中で688万人もの命を奪っています。

そして、パンデミックがようやく沈静化の兆しを見せはじめた2022年2月24日、西側諸国の軍事的圧力に業を煮やした大国ロシアがウクライナへの侵攻をはじめました。共通の起源をもつこの2つの民族国家の争いは、長く続いた冷戦が閉じ込めて凍結させたかに見えた東西の「火種」に薪を焚べて再燃させ、世界中の国や地域を巻き込みながらその暗いトンネルの出口をいまだ見出せずにあります。

そして、2023年10月7日には、「硬い大きな壁」に「ぶつかって割れる卵」の怒りが頂点に達し、パレスチナ自治区ガザから特殊部隊が壁を突破し、イスラエルに対して奇襲攻撃を行いました。イスラエルはこの奇襲に対する大規模反撃を行い、2024年3月1日までにガザ地区では3万人を超える人々が命を落としています。その大半が女性たちと子どもたちという悲劇が今も続いています。

内容

- | | |
|---------------------|------|
| 巻頭言 | (1) |
| 教職大学院を振り返って(修了生の言葉) | (3) |
| 修了生に贈る言葉 | (11) |
| 退任にあたって | (15) |
| 事務連絡 | (19) |

こうした変動する世界、不安定さを増す社会でいま、民主主義が危機にさらされています。世界中のいくつもの国や地域で、長く圧政が続き、不公正と不正がはびこり、人々の市民参画意識が少しずつ、少しずつ、削り取られています。

21世紀を生きるわたしたちには、こうした変動する世界（Volatility）、いつも確証が得られない不確実な世界（Uncertainty）、あらゆる物事が絡み合う複雑な世界（Complexity）、そして責任や正義の所在さえも曖昧な世界（Ambiguity）、このVUCAワールドを生き抜き、個人・社会・地球をよりよい方向へと変革する重大な使命が課せられています。この使命をまっとうするには、わたしたち一人ひとりが高次の能力を育み合い、発揮し合うことが必要となります。近年、そうした能力の1つとして、人間が具える「エージェンシー（Agency）」への注目が高まっています。

わたしは昨年度、雑誌『教職研修』でこのエージェンシーに関する連載を担当させていただきました。この連載を通じて、エージェンシーは個人の生活、集団や組織としての営み、社会や自然のシステム、世界のつながり、そして地球全体の活動、それぞれが互いに絡み合いながら直面する問題や課題に対してわたしたち一人ひとりが責任をもって対峙し、それぞれの「よりよさ」を実現するために人間だれもが具えている大きな力であること、また、エージェンシーは集団や組織や社会や自然や世界や地球とのつながりとかかわりを通して、わたした

ちが他者とともに育み合い、発揮し合うことのできる、共創・協創の力であることもわかりました。

そして、学校教育という文脈の中でわたしたちの学び・探究の経験をエージェンシーへと結晶していくためには、わたしたち自身が「エージェンシーに向けた物語り」をすることが何よりも大切です。子どもたちはもちろんのこと、教師をはじめ学校のステークホルダーみなで、学校の教育活動を通じて何を学び探究し、そこで何に気づき、その気づきがどのようなよりよさにつながっているのかを物語るのです。そうすることで、一人ひとりのエージェンシーが発現し、互いのエージェンシーが結びつき合い大きな力となって私たちのウェルビーイングが高まっていくのです。

連合教職大学院での協働探究を通じて、エージェンシーを最大限に育み発揮し、教師と学校のウェルビーイングを高めていきましょう。そうすることで、子どもたちのエージェンシーが最大限に発揮され、子どもたちのウェルビーイングが高まっていくこととなります。

2024年度の教育キーワードは、教師エージェンシーと教師ウェルビーイング、学校エージェンシーと学校ウェルビーイングになるかもしれません。変動する世界をよりよく変革していくために、互いにエージェンシーを育み合い、発揮し合っていきましょう。



教職大学院を振り返って(修了生の言葉)



2年間を通して

授業研究・教職専門性開発コース 2023 年度修了生

小林 歩実

2年間の中でたくさんの先生方や院生と話すことができました。私は特に人と話すこと、交流することに対して苦手意識が強く、自身の考えや思いを上手く言葉にすることができませんでした。コロナ禍の影響もあり、学部時代に人と話をするという機会が少なかったこと、同じ空間で過ごすという時間も激減していたこともあり、最初の1年間は慣れるというだけで手一杯であり、とても大変であったという記憶があります。人と話すという時間が毎月、毎週設けられることで、人と意見を共有するとは何か、人と話すためには何が必要であるのかを改めて考えることで、交流に対して興味を持つことができ、それがきっかけで、話すこと、表現することの難しさにも気づくことができたと感じました。

また、自身の持つ視点や価値観についても再認識することができた時間でした。教師とはどのような存在であるのか、こどもたちにはどのようなことを学んで欲しいのか、学部時代に学んだことと、現場のギャップを見ながら、どうしたらこの差を埋めることができるのかと答えを探し続ける時間でありました。カンファレンスの中で先生や院生の様々な経験や実践、悩みを聞き、一緒に考えていく中で、自身が課題としていることや、思いや考えの輪郭が少しずつ見えてきたのではないかと感じています。2年間の中でできるようになったこと、気づくことができたこと、これからやりたいことなど多くのこと考え、そして自身の思いを整理することができた時間でした。この経験を大切にこれから先の時間を過ごしていきたいと思います。

資質・能力を育む学びと、繋がりの中での実践・学び

ミドルリーダー養成コース 2023 年度修了生

水谷 雅典

教職大学院で学び始める前、「日々忙しいのに、大学院で学ぶ時間は作れないし、教職大学院って大変そう…」と思っていた。しかし、修了した今振り返ると、これほど教育・教育学について真剣に向き合う時間は、大学院で学び始める前はなかったと感じている。カンファレンスやラウンドテーブルでは、校種も所属も職業も違う方々と対話する中で、行き詰る

実践に対して的確かつ具体的なアドバイスを何度もいただき、それらを糧に実践と挑戦を続けることができた。

長期実践研究報告を執筆する中で、自分自身に改めてこれからの地域や日本、世界を担う生徒にどのような資質・能力が必要かを問い直した。そのような

資質・能力を育成するために教員に求められることが何かを問い直した。ただ、今でもこれらを端的に表現することは難しく感じている。それは、学校内外の様々なコミュニティに属し、階層化・分断化された現代社会で生きる生徒に対し、必要な資質・能力を一言で表すことはできないからである。ただ、ウェルビーイングに向かって自らを方向づけることができるようになるためにも、Agencyを育む学びを続けることは重要なことであると考えている。

特に長期実践研究報告においては、探究的な学びに焦点を当てた。それは、私に課された教職大学院でのミッションが、自身の教科目（理科：化学）だけでなく、校内での探究的な学びの推進、さらにはそれらを活用した多様な受験方式への対応、進路実現への直結であると認識してきたからだ。ただ、2年間の学びの中で得たものの一つとして、探究的な学びは、必要な資質・能力、あるいは一般的に求められる資質・能力を身に付けるための方法の一つである（一つに過ぎない）ということである。つまり、資質・能力の育成を中核にすることが重要であり、これは長期実践研究報告のタイトル「資質・能力の育成を中核とした授業改革と学校の発展-探究的な学びに注目して-」でも強く表すところである。

最も重要なのは、どのような生徒を育てたいのかという願いをもち、そのためにどんな力を育成するのか、何のために資質・能力を身に付けるのかを日々思考しながら教育実践を重ねることである。

この2年間、多方面にわたってご配慮・ご支援をいただきました。まず、本校の先生方には、日々様々な場面でお力添えいただき、教職大学院での学びや

学校での実践を支えていただきました。特に校長の高木俊明先生には、特進コースの担任と探究の推進という挑戦の場を与えてくださり、日々実践を温かく見守っていただけたこと、大変感謝しております。

教職大学院で共に学びを深めた先生方とは、実践や理論を通じて互いに学び合うことができ、同じ志をもって歩みを進める仲間が多くいることに何度も勇気をいただきました。また、教職大学院での繋がりをこえて学び合う仲間ができたことにも感謝しております。

岐阜聖徳学園大学の寺田光宏先生には、大学卒業後、何度も教職大学院で学ぶことを勧めていただき、勇気が出ない私の背中を押していただきました。教職大学院の2年間においては、常に学びをサポートしていただき、学会発表等も含め、何度も挑戦する機会と成長する機会、学びの機会をいただきました。修了後も実践報告や、学会発表等を行っていきたく思います。ありがとうございました。

教育実践の中心にはいつも生徒がいる。私が教員として挑戦・成長し続けることができることや、教員として在り続けられるのは、目の前にいる生徒のおかげである。そのことに感謝すると同時に、VUCA時代の地域・日本・世界の明日を切り開く生徒諸君に期待したい。

最後に、土日も仕事や大学院へ行き、長期実践研究報告の執筆中には1日中机に向かう私を、温かく見守り支え続けてくれた家族に感謝をして、結びとする。

コミュニケーションの場を創る

ミドルリーダー養成コース 2023 年度修了生

河合 創

「授業はコミュニケーションの場。すなわち、良い授業は、良質なコミュニケーションが行われる場であるということ」。これは、私が教職1年目の時に、先輩に教えていただいて、今でも大切にしている言葉です。

教職大学院には、いわゆる講義型の授業はありませんでした。学生が、個々に文献やレポート、記録を読み、考えたことや気づいたことを書き起こし、それを元にグループで語り合う。その対話の中で新たな気づきや問いが生まれていく。誰が正解を教えてくれるわけでもなく、ややもすると、もやもやとした感情だけが残る日もありました。そのもやもやを持ちながら、また学校で実践を繰り返し、省察する中で、少しずつその輪郭が見えてきたりもします。漠然としたもやもやが、今の自分にとっての新たな学びのチャンスになることにも気づいていきます。何かを教えられることはないのだけれども、学ぶことが多くある、そのようなコミュニケーションの場が教職大学院にはありました。

私は今期、ミドルリーダー養成コースを修了しました。教職人生が16年経った今でも、若手の気持ちでいる(いたい)私にとっては、ミドルリーダーという立場にピンとこないというのが正直なところですが、

私などが、学校の中堅として、学校を動かす立場になれるのか、後輩の先生方に何かを伝えられる器量はあるのだろうか。そんな不安があるのも事実です。しかし、この大学院での学びは、そんな不安を抱えている私の背中をそっと押してくれているような気もしています。ストレートマスターの学生さんも、管理職の立場にある先生方も、異業種で活躍されている方も、同じテーブルに座り、フラットに語り合う場が常に大学院にはありました。「問い」を前に、我々にあるのは上下関係ではなく、肩を並べて対話をするコミュニティとしての関係性でした。対話の中で学ぶことは人それぞれで、その多様さがさらにコミュニティの発展を促すのだと感じます。教える、教えられる関係ではなく、共に学び合うコミュニティを創っていく。授業においても、職場においても、地域社会においても、そのような場を創るために自分に何ができるのかを考えていく。それがミドルリーダー修了生に課せられた使命なのかなと思っています。

教職大学院では、本当に多くのことを学ばせていただきました。この大学院で出会った多くの方に感謝の念を抱きつつ、これで終わりではなく、これからもよろしく願いいたします。

わたしを変えた教職大学院での学び

学校改革マネジメントコース 2023 年度修了生

大橋 圭子

3月23日に、学位記伝達式および再出発のカンファレンスに参加させていただいた。2年間お世話になった教職大学院での最後のカンファレンスと思う

と、感慨もひとしおで、ラウンドテーブル以来1か月以上足を運んでいなかった大学は懐かしくさえ思われた。

再出発のカンファレンス前に木村先生から修了がスタート地点、これまでの学びを振り返り、次への行動をデザインしていく「リスタート」というお話をお聞きした。さて、久々のカンファレンス。わたしの大好きな語り合える時間だ。しかし、長期実践研究報告を書き上げて、今のわたしに何が語れるだろうという思いで臨んだということも事実である。

小林真由美先生の進行で、同じ修了生である小林歩実さんの2年間で語られた。小林さんの語りの中で美術科の授業実践を通して「楽しく」「認めること」ということに気づかれていったことが語られた（少なくともわたし自身はそのように解釈してお話をお聞きした）。やはりキーワードは「楽しい」だと再確認するような思いで小林さんのお話を興味深くお聞きすることとなった。というのも、今月の11日に勤務校で行われた今年度最後の全体研究会で語り合われた内容が思い起こされたからである。

11日の研究会は、8日に卒業式も終え、ちょっと一区切りした感のあるときに設定されたもので、まさに勤務校における来年度へ向けての再出発のカンファレンスである。「今年度の私たちの学びを振り返り、来年度につなげましょう」と題して、年間2回行う学校評価アンケート結果から、スクールプランの数値目標に達しなかった項目について、来年度に向けてどう取り組もうかということ、授業公開グループごとに語り合う時間とした。今年度、私たちの学校では、昨年度の授業公開の反省をふまえ、異年齢、異教科、異学年のメンバーで構成した4グループで、年間を通じてそれぞれのチームごとに設定したテーマの追究を行ってきたが、おなじみのメンバーでの語り合いなので、気心も知れており、回を重ねるごとに話しやすい雰囲気が醸成されてきている。数値目標に至らなかったのは、「授業がよくわかる」と「学校が楽しい」の2項目であった。それぞれのグループで話し合われた内容を最後に共有するのだが、その中で、『「わかるけれど楽しくない」と子どもが感じる授業だったらいやだよね」とか、「それぞれの子の『わかる』の内容には違いはあるかもしれないけれど、『わかる』と感ぜられるのは、その授業に参加し

て子どもたちが『楽しさ』を感じたときじゃないだろうか」「どの子どもが参加していることが実感できるような授業づくりをしていきたいね」などということが語られていった。キーワードは「楽しい」だということを感じたし、そこからさらに、子どもたち自身が今自分たちが学びを進めていることの意味を実感できるように、わたしたちも取り組んでいこうという思いをもつこととなった。まさに、来年度の学校としての授業づくりの方向性を語り合う時間となった。このような先生方との語り合いで、来年度へのつながりを確認できたのも、語り合い中心で研究会を進めてきたおかげであったのかもしれないと思うし、学校での語り合い中心の研究会は、自分にとっても毎日がラウンドテーブルという感じで心楽しい時間であった。そういうふう先生方が語り合って学び合っていく研究会を重ねられたのも、教職大学院で学ばせていただく中で感じ取った「語り合い」がもたらす素晴らしさがベースにあったためである。

さて、1年生の国語の最後の方の教材として「随筆二編」と題された作品が載せられている。卒業式後、あと3時間くらいしか授業がない頃に授業をした。つい先日、3月21日が最後の授業であった。子どもたちにとっては、「おれはかまきり」などの「のはらうた」の作者としてなじみのある工藤直子さんの随筆作品である。随筆って何？から授業は始まった。はじめは、読んで感想を語るくらいで終わろうかとも思っていたのだが、1年間一緒に授業をしてきた子どもたちが随筆というものを書いてみるとどんなだろう、とふと思ひ、教材文にならって「自然」と「言葉」のどちらかのテーマで随筆を書いてみようともちかけた。1時間かけて書いた作品を次の時間に「随筆を語る・随筆を聞く」と題して、読み聞かせの感じでお互いに紹介していった。書かれた作品を読んだ際には、そこまで感じなかったのだが、書いた当人から語られると、それぞれの作品には、「自然」がテーマでも「言葉」がテーマでも、そこには彼らに関わる「人」が語られていることに気づかされた。祖父母の家にある畑について語った生徒は畑のことを語ることから、雪かきをしてくれた祖父のことなどに話が及び、思いがけず祖父母との思い出が語られること

となった。うまくいかないことがあったときに、祖父からかけてもらった言葉について語った生徒は、そこから考え方を改めて、めげずにがんばれたことが語られることとなった。語る子どもたちはまさに作家であったし、語りを聞く子どもたちは、それぞれの語りを集中して聞き、教室は温かい雰囲気に含まれていった。子どもたちは、期せずして、それぞれの心の中にある大切なものを語ってくれたのだと思う。子どもたちの語りが終わった後、思わず、自分自身が4年前に父を亡くした際、斎場から父を乗せた車から見た、刺すような寒気の中の冬晴れの山野の山並みの風景とそれにまつわる父との思い出を語ってしまっていた。自分のことを語ろうなどという気持ちになろうとは思ってもいなかったのだが、そんな気持ちにさせられる雰囲気に包まれた授業となった。これまでのわたし自身は、授業は決め決めで行ってきっていた。ここまでの発言や考えが子どもたちから出たらいいなと、目標を決めてそこまでに持って行くにはということに力を注いでいたように思う。今回の随筆の授業や、今年行った平家物語の音読の授業などは、決め決めで行ったものではなく、子どもたちのもてる力に任せて行ったものであったかと思う。行き当たりばったりじゃないのという批判もあることとは思うが、こうしてああしてと細かい指示をしながら行う授業に比べて、何が子どもたちから出てくるかというワクワク感と、この子たちってすごいなという感動を味わうことができたし、自分自身、授業をする楽しさを改めてそして大いに感じることもできた。子どもたちに任せることで、自分自身には大きな学びがもたらされることとなったし、その学びは、子どもたちが自分ごととして捉えて取り組んでくれたおかげでもあるかと思う。先述の「語り合い」の今年の研究会についても、先生方が自分たちのチームのテーマを自分ごととして追究して下さったおかげで、共有する場面で語られる考えは、テーマは違っても到達する場所がよく似たところであったということも、バラバラに進んでいるようで、突き詰めていくと、教育目標達成に向けて、先生方が自分ごととして探究を続けて下さったおかげであったのだろうということに思い至る。

わたし自身、この教職大学院で学びたいと思ったのは、前任校で研究主任という役割に取り組む中で、どうしたらどの先生にも研究をやってよかったという思いをもってもらえるのだろう、その答えを得たいと思ったからだった。月々のカンファレンスやラウンドテーブルでさまざまな立場の先生方と語り合わせていただく中で語り合いの楽しさを実感し、たくさん示唆を得た。夏と冬の集中講座では、これまで縁のなかった理論書を読みかじる経験をさせていただくこととなり、理論と実践の往還が意味することをやると実感することができた。また、長期実践研究報告を書いていく際に自分自身と向き合うことで、「ねばならない」を人に押しつけていた自分のいやな部分を否が応でも見つめることとなった。あときは本当に自己嫌悪に陥ったが、その機会を与えていただけたおかげで、「ともに進む」「ともに創る」ということの意味に気づかせていただくことができた。この2年間は、おそらく、自分自身のものの捉え方を大きく変えていただいたかけがえのない時間であったのだと思う。そして、この2年間で出会い語って下さった方々と、それまでの自分に関わって下さった方々への感謝の念（それはもちろん子どもたちも含めて）を改めて感じることでできた時間となった。

以前の自分を知っていらっしゃる先生に、今年授業を見ていただいたことがある。「授業が変わってきたね」という言葉をいただいたのは、本当にうれしいことだ。子どもたちに任せていくことで子どもたちの力の発現を見てとることができるときほどうれしいことはない。それが本当に「子どもたちとともに授業を創る」ということなのだろう。そして、そんなときは、子どもたちも自分たちの学びの意味を感じているのではないだろうか。

教職大学院での学びの時間は、心から楽しかった。だから、この時間が終わってしまうことが心から寂しい。しかし、楽しかっただけではなく、自分自身が変わっていった2年間であったことにもようやく今になって気づけるようになった。答えを求めて教職大学院の門をたたいた自分ではあったけれど、その

答えは、教えていただくものではなく、自分自身で気づき見つけ出していくものであることもこの2年間で実感してきている。わたしは、これからもまた考え続けていくのだろう。修了がスタート地点。この言葉の意味をかみしめながら、また、先生方と子どもたちと一緒に進んでいきたいと思う。

この2年間、お世話になりました。この場所はわたしにとっての心の拠り所でした。心から感謝申し上げます。

福井大学教職大学院でしか経験できない2年間の貴重な学び

学校改革マネジメントコース 2023 年度修了生

黒田 佳昌

2年前の4月2日、初めて足を踏み入れた福井県、そして福井大学文京キャンパス。東京よりはるかに肌寒かったことをよく覚えている。教室内で初対面の院生たちの中に入り、「やっていけるのだろうか・・・？」ととても不安に思ったことがつい昨日のようである。しかし東京サテライトを中心とする学びの場は、まさに私が期待していた通りの魅力的なものであった。

2年間の教職大学院での学びは、他者の話を傾聴することで他者の思いや考えに深く入り込み、他者の立場になって考えたり、自分を省察したりすることができた。また自分の経験や考えを相手に伝えることで、自分の思考を整理し省察することができた。

とは言っても働きながら教職大学院で学ぶことは、決して楽なものではなかった。日々の校務に追われるだけでなく、様々な教育課題への対応や保護者対応など多忙な中の学びであったことは事実である。校長という立場でもあり愚痴や不満を言うこともできず、ストレスフルで押しつぶされそうなこともあった。しかし東京サテライトでの学びの時間や福井ラウンドテーブルなどの時に大学の先生方や院生の話を傾聴し、対話することは、自分にはとても良い気分転換になっていた。そこで思考を変えてみることで新たな考え方ができたり、終わった後に充実感を味わい気持ちをリフレッシュしたりして、「しんどい

のは、自分だけではない、みんな頑張っている。」と自分を奮い立たせてくれた。

長い教員生活でやってきていることなのだが、教師同士が日頃から同僚性を育みながら、じっくり語り合い、対話することの大切さを学んだ。これからも教育という世界に携わっていく中で、いつでも心にゆとりを持ち、誰にでも誠実に向き合いながら、対話する姿勢を持ち続けていきたいと思う。

そして3校の校長を経験する中で、子どもたちが学びを受け身ではなく、自ら主体的に見通しをもち計画を立て、学び続ける資質や能力を身に付けることが大切であることがわかった。また自分で考え、判断し、決断して行動する力の基礎を培うこと、意見や考えの異なる他者を尊重し、丁寧に対話や議論して対立を乗り越えることができるようになる力を付けさせることが、義務教育最終段階の中学校教育としてやらなければならないことであると考えようになった。これも教職大学院でのいろいろな学びの中からたどり着いた結論である。

教職大学院に入り、人と人とのつながりや対話を通して学び合うことを体験し、自分なりの成長があったように感じている。教職大学院の院生や大学の先生方から学び得たことは大変大きく、この学びをこれからも学校教育、学校改革につなげていきたいと思う。この2年間の学びに気付かせてくれたすべ

ての人に心より感謝を申し上げ、教職大学院の幕を閉じたいと思う。

充実していた学びを振り返る

学校改革マネジメントコース 2023 年度修了生

高橋 和代

令和 6 年 3 月 23 日の「学位伝達式」、「再出発のカンファレンス」をもって教職大学院の学校改革マネジメントコースを修了しました。「学位伝達式」で自分の名前が読み上げられ際には、自分自身が歩んできた道のりをふり返り、無事に修了できたことに安堵したとともに、これから自分がしなければならないことにも思いを巡らせ、気持ちが引き締まりました。

私が教職大学院で学び始めたのは、県のマネジメント研修の受講がきっかけです。教務主任として壁にぶち当たり、自分自身にもっと力を付けなければという思いで、研修の受講を決意しました。研修を受ける前は、マネジメントを円滑に行う直近の方法をすぐに知りたいという思いがありました。しかし、研修ではすぐに答えを教えていただけただけではなく、他者と語り合いながら、過去そして今の自分と向き合い、自分自身で答えを導いていきました。私にとって、その学びがとても心地よく、楽しい時間となりました。当初、1 年間のマネジメント研修だけで学びを終えようと考えていたにも関わらず、教職大学院に入学させていただいた一番の理由は、今までに味わったことのない「学びの楽しさ」を知ったからだと思います。

とはいえ、現場で通常の仕事をしながら、教職大学院に通うことは決して楽ではなく、長期実践研究報告を書く時期には、毎日頭を抱えながら机に向かい、夢の中までも悩み苦しんでいました。それでも、その苦しさを含めて学ぶことは楽しかったのです。

私がそのように感じられた一番の理由は、教職大

学院で、「省察的な学び」「対話という学び」「共に学ぶ仲間」に出会えたからだと思います。

「省察的な学び」については、カンファレンスのたびに、理論と実践を往還しながら、自分自身の実践と向き合いました。初めから上手に行ったことはほとんどなく失敗ばかりでしたが、定期的に同じ志を持つ仲間が集まり、大学院の先生方を交えた語り合いの中で、上手く行かなかった実践の解決の糸口を見つけられたとき、充実感でいっぱいになりました。

「対話という学び」については、教職大学院で色々な人と言葉をかわして語り合いましたが、その際の聴き手が受け入れてくれるという安心感、対話を通して仲間と思いを共有することの喜び、対話を通して自分の実践が深められる実感は、学びの充実につながりました。

「共に学ぶ仲間との出会い」においては、教職大学院の先生方、学生の方々等、世代や職種が違う方とたくさん出会わせていただきました。多種多様な実践や省察と出会う中で、自分自身のこり固まった価値観に変容が見られました。特にカンファレンスでファシリテーターを務めていただく先生方からのアドバイスや私の実践への価値づけは、私自身の新たな発見につながりました。

教職大学院での学びのおかげで、学び始める前の自分より視野が広がり、多様な価値観、考え方ができるようになったと感じています。それは教職大学院の先生方、そして共に学んだ仲間のおかげです。教職大学院で出会った全ての方々に感謝いたします。私

はこれから、教職大学院の学びをさらに深め、学んだことを共に働く同僚に繋いでいきたいと思います。

新たな課題

学校改革マネジメントコース 2023 年度修了生

武藤 基彦

入学の頃は、長く思われた教職大学院の2年間でしたが、今振り返ってみると短く感じられます。1年目は研究主任や学年主任の取り組みを通じて、コミュニティについて考えた1年間でした。そのまま、2年目も校内研究という視点でコミュニティについて実践的に学びを深めていこうと考えていました。

2年目は教務主任となり、研究主任に比べてより広い視野で学校づくりに取り組んでいくことになったので、2年目の教職大学院の学びは、「しんどかった」というのが本音です。しかしながら、月々のカンファレンスで様々な仲間たちやファシリテーターの先生方と語り合う中で、自分の取り組みに自信をもてたこともあります。また、自分では気付かなかったことや解決のヒントを得たこともあります。一人で悩みがちな自分にとっては、クロスセッションの仕組みは心の安定にもつながりましたし、独学では学び得ないことも学べたと今になって思えます。

このような仕組みを勤務する学校にも広げて行きたいとカンファレンスの帰り道にいつも思っていました。自分の思っていることや考えていることを学校の仲間たちと語り合える場を作ることこそ学校改革につながっていくのだと2年間で学びました。そのためには、そのよさを伝え、やってみることでさらにそのよさに仲間たちに気付いてもらうような取り組みをこれから地道に続けていくこととします。子どもたちにも伝えているように、「まずやってみる」、そして「振り返って考えてみる」という学びのサイクルで教員自身が自分の力を高めていける学校にしていくことが私の課題の1つ目です。

再出発のカンファレンスでは、今年度で退官される松田先生がファシリテーターでした。私を含めた修了生が教職大学院の学びについて語りました。そこで、松田先生から、「これからはチーム学校とコミュニティの違いについて考えてほしい」というお話がありました。2年間、コミュニティについて学びを深めていく中で、学校組織とコミュニティとの違いについて考えることがありました。学校にはしなければいけない職務があります。その職務を遂行していく中で、コミュニティはどう関わっていけばいいのか、コミュニティを作ることが協働につながっていくのかと様々に考えることがありました。そのような疑問をもちつつも自分の取り組みに生かすことは残念ながらできませんでした。教職大学院の学びは終わりますが、私には学校という実践の場があります。これからは、松田先生の話の中であった「チーム学校」と「コミュニティ」についてより学びを深めていくことが私の課題の2つ目です。

教職大学院で学んだことで、そのまま学校で働いているだけでは学び得なかったことが多くあります。自分の教員人生を振り返り、自分の指導のバックボーンとなっているものを再確認できました。また、様々な実践を読み、丁寧に書くことで追体験したことで、その実践に迫ってみたいという思いをもてたこともありました。さらに、何より自分が考え実践したことを長期実践研究報告に書いたことは、本当につらい道のりでしたが、自分の歩みを確かめ、次への展望が開くきっかけとなりました。そして、再出発のカンファレンスで次への課題を見付けることもできました。学びをここで終わりにせずこれからも実

践を通した学校づくりを続けていこうと決意を新たにしています。そして、思い悩んだ時には、ラウンド

テーブルに参加し、また元気をもらおうと考えています。本当に2年間ありがとうございました。



修了生に贈る言葉



たくさんの出会い

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校 川嶋 海音

修了生のみなさま、ご卒業おめでとうございます。最近暖かい日が増えてきており、春を少しずつ感じています。

私は今年度教職大学院に入学し、早くも1年経ってしまいました。この1年間新しいことだらけで、刺激的な毎日を過ごしています。2月は、インターン先の高志高校で、大学入試に向けた特別講義があったため、私自身も数学の力をさらに付けたいと思い、一緒に受験生と講義を受けていました。そこで、一人の生徒に出会い、将来のことや学校のことなどたくさん話をして仲良くなれたのが今年度1番の出来事です。受験生というのは毎日毎日自分の夢のために必死になって、私も感化され学部の授業のテストと一緒に頑張って勉強することができました。そうした多くのエネルギーを生徒からもらえ、その生徒たちが全力を尽くしている姿は学校現場でしか味わえないものだなと改めて感じています。私も、このように頑張る生徒たちの手助けになれるような教師になりたいと思うようになりました。しかし、受験というのは一発勝負ということもあり、受験に落ちてしまう生徒も一定数いるというのが事実です。私自身も生徒の合格発表の日はドキドキして、何も手が付けられませんでした。大学入学というのは高校生にとって最も大きいもので、それで失敗したら終わりだと

感じている生徒もおり、(当時は私もそう考えていた)廊下などで歓喜したり悲しんだり様々な光景がありました。そこでの教師のサポートというのは生徒にとって影響力の大きいものだと私自身思い、あの先生に相談したいと生徒が思えるような教師になりたいとも思いました。

他の院生の皆様もきつとなにかこうした大きな印象深い出来事があったと存じます。金カンでも、他のインターン先の出来事を聞いたり、私自身のことを話したりし、そこで得られたものをインターン先で実践することもありました。そこでは、失敗して、なぜこうなってしまったんだろうと落ち込んでしまうこともありました。しかし、そこで得られたものは大きく、来年度でも活かしていこうと思っています。月間カンファレンスでは、現職の先生方と金カンではでないようなアドバイスや助言をいただき、そういう考えからもあるのかと新しい視点をいただきました。そして私は免許取得プログラムで数学の免許を希望しているので、学部生との授業もうけることができ、そこでの学びも多く、忙しい毎日ですが、たくさんの出会いに恵まれた年だと感じています。

来年度は、インターンの回数が週1回から2回になり、より多く生徒と関われ、授業をさせていただくことができると思います。そこで、今年1年で得た

学びを活かし、さらにそこで悩んだときカンファレンスで院生や先生方の考えを聞いて、自分らしい教師像というのを探していきたいと思っています。

You'll never walk alone.

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

櫻井 翼

今年度修了される院生の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様のこれからのご活躍を心よりお祈りしております。

このニュースレターの記事を書いている少し前に、私は1年目のまとめを書いていました。その段階で、これまでの記録や、様々なカンファレンス等を振り返っていると、今年度修了される院生の皆様との対話した出来事が思い返されます。こうして振り返ってみると、私が歩んできた教職大学院での学びは、決して一人で創ってきたものではなく、修了される院生の皆様を含めた様々な人々との関わりがあってこそその産物だと感じています。これは、皆様にとっても同じ思いを感じているのではないのでしょうか。

長期実践報告会やラウンドテーブル等では、今年度修了される院生の皆様の長期実践報告を見聞させていただきました。長期実践報告に書かれている、または語られる言葉には、その院生によって様々な色がありました。実践を通じて生まれた児童生徒の学びの歩みを映し出す人、これまでの経験を振り返り自分自身を省察する人、印象的な場면을切り取って思いを語る人……。人によって、これまでをどのように振り返り、またそれをどのように言葉として紡いでいくのかに違いがあり、その全てがとても印象的に残っています。また、これらには児童生徒の学びや自分自身の成長といったようなポジティブなものが語られている一方で、失敗や実践での苦悩といったネガティブなものも多く含まれていました。しかし、そうしたネガティブなものが、成功や実践、新た

な学びへの展望といったように、次につながるものとなっています。私も振り返ってみると、この一年間で多くの失敗や苦悩などを経験しましたが、それを金曜カンファレンス等での場面で省察・対話をしていく中で、「次はどうしようか」と考えることにつながっています。また、自分が書いた1年目のまとめを見返すと、1年間で起きた出来事がそれぞれ単発で終わったのではなく、全ての出来事が複雑な関係性を持っていました。そして、この記事を書いている現段階では、1年目のまとめを書くという省察を経験し、来年度に向けてどのように歩んでいこうかと構想しています。教職大学院を通じて、実践記録を書いたり、様々なカンファレンスで対話をしていったりする中で、多くの省察を行い、今後の展望を拓くサイクルが、今の自分自身を築き上げていると思っています。

今回のニュースレターのお話を受けて、私はある言葉を想像しました。それがタイトルにもあるように、「You'll never walk alone.」という言葉です。これは私が好きな言葉の一つです。直訳すれば、「あなたは決して一人では歩かない」という意味になります。私はこの言葉に、ここまで書いてきたような教職大学院での学びの姿が表れているのではないかと感じています。加えて、この言葉には「will」が使われています。Willは未来を表現するときに使われる助動詞ですが、これには「意思」という意味も込められています。すなわち、教職大学院での学びの姿を、「これから(未来)」もつなげていく「意思」を持つことも捉えることができると思います。これまで私が出会ってきた中で、カンファレンスやラウンドテーブル

終了後に、こうした対話の重要性、所属する学校や教育機関への必要性を感じていらっしゃる院生・先生方が多くいらっしゃいました。まさに、教職大学院での学びの姿を、「これから（未来）」につなげていく「意思」が現れている姿だと思います。こうした思いや、修了される院生の皆様への贈る言葉として、「You'll never walk alone.」というタイトルをつけさせていただきました。

最後になりますが、今年度関わらせていただいた修了生の皆様に感謝申し上げます。特にストレートマスターM2・M3の先輩方皆様一人一人には、それぞれ多くの場面で支えてくださいました。私はどのように言語化すればいいのかと悩むことが多く、時には長くなってしまったり、伝わりづらかったりした部分もあったかもしれませんが、しかし、親身に耳を傾けて、価値づけしたりつなげたりくださったことで、今の自分の学びが広がっていると思います。本当にありがとうございました。

出会いと学び合いに感謝します！

学校改革マネジメントコースコース2年/法政大学中学高等学校 石川 秀和

2024年3月23日、福井大学連合教職大学院の「令和5年度 学位記伝達式」が挙行され、私は東京サテライトから参加しました。修了生の皆様、本当におめでとうございます！そして、お疲れ様でした。伝達式の後に行われた最後のカンファレンスが「再出発のカンファレンス」と非常に魅力的な名前であるように、これで終わりではなく、お互い学びあったものを糧に次のステージに進むわけですが、とにかく「お疲れ様でした」と何度もお伝えしたい気持ちでいっぱいです。

私学で勤務している私にとってはこの1年間様々な方々と学び合ったことの全てが新鮮でした。今まで聞いたこともない単語との数々の出会いに、初めは慣れるのに苦労すると同時に緊張の連続でした。そんな中、修了生の方々に非常に真摯で「やさしい」声かけをいただきました。まるでみなさんとの学び合いについていくことがやっとで遅れを感じていた私の心を読み解き、対話をしてくださったようでした。日々の教育活動と大学院での学び合いの両立に押しつぶされそうになりながらも何とか歩んでいる自分にとって一歩先を歩まれている修了生の言葉一つ一つに深みを感じますし、自分自身が励まされ、何

度となくエンパワーされました。修了生の皆さんに心から感謝しております。

「自分の中のこうあるべきをいかに突き崩すか」「教師として歩む前に人として誠実に生きる」「感覚的に生きていると考えていたが実は様々考えていた自分に気づいた」「悩んでいることや困っていることを開示できるようになった」「不安や分からないことに向き合うことができるようになった」などなど最後の日まで、皆さんとの学び合いから多くのことを学ばせていただきました。

3月23日以降、さっそく気づきを実践してみました。職場で直面している課題などを同僚に伝え共通認識を持つように努めてみました。すると“スッ”と気持ちが軽くなり、まるでつきものが取れたような感覚となりました。東京サテライトでは「対話」というキーワードが様々な場面で登場していましたが、自分自身がそこで学んだことを、身を持って体験したような気持ちになりました。課題が解決し、大きな前進が得られた訳でもなく、解決の糸口がくっきりと見いだせたわけでもないけれど、同僚との間に共通言語で語り合うことができる可能性を見出すことができた瞬間、一筋の光明が差し込み、将来が暗いと思われた中で、希望となる物事の存在が明らかにな

ったように思いました。毎回毎回のカンファレンスで気づきや学びがあったことを自分の学校で自身が直面している状況に合わせて組み替え、試してみるとそこから新たな学びが得られると同時に課題が見えてくる、この1年間修了生の方々や先生方から教えていただいたことが最後まで取り組めたことに自分自身、驚いています。これも、修了生の方々や再出発のカンファレンスに至るまで、示唆に富んだキーワードを残してくださったからだと考えています。

修了生の皆さんが、教職大学院での学びを活かして4月より子どもたちや同僚の方々と共に授業や学校づくりを精力的に探究される姿が目に見え、参ります。1年間一緒に学ばせていただいた関係ではありますが、是非ともお願いがあります。それは、これからも皆さんの実践を伺い、引き続き学び合いの輪を大切にさせていただきたいと考えています。

図々しいお願いで恐縮ですが、是非とも先生方の現場を見学し、学ばせていただきたいと思っております。それぞれの学校が積み上げてこられたものがあるので、学ばせていただいたものをそのまま法政で実践できるとは限りません。しかしながら、様々な気づきや触発をもとに同僚と対話をし、法政での実践をより教育的で学びの多い活動にしていきたいと考えています。自分自身としては、引き続き授業をひらく取り組みを主体的力量の中で発展させ、法政の中でもラウンドテーブルのような実践を交流し合う場を構築していきたいと考えています。

みなさんとの学び合いのこの1年は自分の歩みの中でも意味のある、中身の詰まった時間とすることができました。これからの皆様の益々のご活躍を祈っております。どうか健康に留意してお過ごしください。ありがとうございました。

1年間の思い出と感謝

学校改革マネジメントコースコース2年/独立行政法人教職員支援機構 目見田 紋未

令和6年3月23日。今年度の学位授与式がありました。「卒業式」や「学位記伝達式」というものには教員の方々ほど縁のない私にとって、「送る者」としてこのような式に参加するのは十年以上ぶりのことでした。

式というのは不思議なものだなと思います。淡々とお名前を読み上げられているのを聞いているだけなのに、その方との対話の記憶が蘇ってきます。1年間、カンファレンスの場を中心に、たくさんの人にお世話になり、たくさんの人の言葉から学ばせていただいたのだなと、あらためて実感をしました。

今回のテーマは3月で修了される皆様への「贈る言葉」とのことです。私は、この場をお借りして、感謝をお伝えできればと思います。

昨年の4月、教職大学院で一体どんなことをするかもまだ十分イメージを掴めないまま初めてのカン

ファレンスに参加したとき、2年目の方々、あるいは1年履修で既に経験をされていた方々が、とても豊かに言葉を紡ぎ、生き生きと対話をされている様子を見て、不安の気持ちが「楽しみ」に転換されたことをよく覚えています。「心配なこともあると思うけれど、皆そうだったからきっと大丈夫」という言葉に少し安心したと同時に、「受け身ではなく、自分自身で実践し、考えていく必要がある」ということも、このときに教えていただきました。私には職場や周りに福井大学教職大学院のことを知っている先輩はいませんでしたので、カンファレンスの場でこうやってお話をしてもらおうことが、何よりの支えになりました。

年間通じた対話は毎回大きな学びになりました。また、毎回の対話で語っていただいたそれぞれの実践とその想いは、「この方の実践の展開をもっと知りたい・見たい」という思いを強く抱くような内容ばかり

りでした。実際、今も「あの方の実践記録をぜひ読みたい」と頭に浮かんでいる方々が沢山います。「あのとき悩んでいたことは、今はどうなったのだろう」「どんな思いが実践に繋がったのだろう」と、相手の実践の「その先」についてや、「実践の元になる想い」に興味を持てるようになったのは、豊かな実践を展開し、対話と省察を深めてきた諸先輩方の姿のおかげだと感じます。

実践記録の作成の大変さと、充実感についても日々伝わってきました。これからきっと手に取ることができるようになるのだと思います。皆様の歩みを大事に、大切に読ませていただき、私自身の学びにもしたいと考えています。

私はこの1年間、福井大学教職大学院の強みは、「同じ志を持った仲間、コミュニティが繋がり、広がっていくこと」にあるなあと強く実感していました。ラウンドテーブルの場でも、日々のカンファレンス

の場でも、「対話」の場における「暗黙の了解」がきちんと機能しているからこそ、対話が充実したものになっているように感じます。福井大学教職大学院を中心としたコミュニティは本当に大きな財産であり、そこに組み込まれている院生は、修了したあともそのコミュニティの一員として、対話と協働の発展に寄与していくことになるのだと思います。

3月に終了される皆様は、これからそれぞれの地で、ますますご活躍されていくものと思います。私は一人の後輩として、あるいは、教育行政に携わる一職員として、皆様の実践の展開にぜひ今後も興味を持ち、そこから学んでいきたいと考えています。そして、修了後も変わらず、対話と協働のコミュニティの一員として、ともに学びあえる機会があると嬉しいです。

この一年間、本当に沢山の学びをありがとうございました。皆様の今後のより一層のご活躍を祈念しております。



退任にあたって



世界と福井、教育と未来、これからも

元連合教職開発研究科 准教授 **高田 宏仁**

JICA（国際協力機構）からの出向者として3年間お世話になりました。まったくの門外漢を優しく受け入れていただき、そのうえ、少しはお役に立てたのかなという「自己有用感」を与えていただいたことに感謝しています。

過去、中南米の国4ヶ国で13年間、長期滞在の経験をしたのですが、福井での3年間はそれ匹敵する程興味深く学びの多い時間でした。

私は、国際協力における地域開発やそれ以前の地方行政（県庁での森林官／林業普及員）の経験、そしてJICAでの国内業務の経験から、「地域に生きる人の中には国際感覚豊かな人・国際的に活躍できる人がいる」ということを感じていました。今回、福井で出会った先生方にもそういう方が少なからずいらっしゃることに勇気をもらいました。行ったこともないエジプトの先生と堂々と語り合える先生、大学や福井の教育の未来を国際的なレベルで俯瞰的に見通せる先生、地域での深く豊かな経験で得られる学び

は、語学力を越えて国際的にも通じるものとなることを改めて確信した3年間でした。

また、当たり前ですが、教育は、すべての国にとって基本的で重要なテーマ/課題であることを再認識しました。開発途上国での勤務時は、教育は国家百年の計であるとして、現地政府の関係者とその課題解決に向けて議論したのですが、百年を超える公教育の歴史を持つ現代の日本でも、教育の在り方に悩み、真剣に取り組む福井の教育関係者の姿は、多くの研修員を勇気づけてきたと感じています。

この教育に携わるすべての関係者が持つ、知恵と情熱と協働の精神は、世界の教育の現状を変えていくポテンシャルを持っていると思います。今後の国際分野の展開と、それを支える福井の教育の発展を心より願っています。

ところで、福井に赴任した際に、ひとつの裏ミッションを持っていました。それは、以前パナマに駐在していた経験から、「琵琶湖運河が実現できないか」を検証するというものでした。実は、敦賀から山を越えて琵琶湖を船で通過し、再度山を越えて大阪湾に至るルートは、実際のパナマ運河とよく似ています(総延長は120kmほど、パナマ運河は約60km)。パナマ運河は、3つの大きな水槽(閘門:こうもん、といいます)を利用して27mの高さにある内陸湖(人造湖)まで上ります。しかし、琵琶湖は海拔84mもあり、また最低でも200mを越える山々を掘削する必要が

あることから、現実的には難しいことがよくわかりました。

しかし、パナマ運河を遡ること数百年も前から、琵琶湖運河のアイデアが生まれ、何度も実現に向けて議論されてきたことは、この地域が日本の経済や流通の中心地であり、世界とつながる要衝であったことを物語っています。今回の福井勤務では、そのことを、身をもって実感することができました。

余談ですが、先日は、北陸新幹線の敦賀延伸に立ち会うことができました。自分自身の任期延長もあり、このような歴史の転換点(吉か凶はこれから次第でしょうか)に立ち会えたことを幸運に思っています。

今後の仕事ですが、JICAに戻った後は、カリブ海の小さな国、セントルシアに赴任することになります。カリブの国々は、大陸の多くの国とは異なる歴史と文化を持っています。あらためて、初心に戻って、その国をゼロから知ることから、始めたいと思っています。そして異なる立場で、福井大学の国際展開を応援していきたいと思っています。

最後に、個人的な願望で、また可能かどうかわかりませんが、機会があればオンラインでラウンドテーブルなどにお邪魔したいと思っています。その時は、是非、福井の最新情報を教えてください。

3年間、ほんとうにありがとうございました。

退任のごあいさつ

元連合教職開発研究科 非常勤講師 花木 秀実

5年間、連合教職大学院で非常勤講師として勤めてまいりました。院生の皆さんの学び、社会教育主事講習、エリアコーディネーターとして嶺南地区の学校の校内研修等々のお手伝いなどをしてきましたが、支援や指導というより、いっしょに学ばせてもらったというのが正しいと思います。

教職大学院は、浅学非才、無知蒙昧な私には全くアウェーというか、場違いなところだとずっと思っていました。しかし、先生方とFD(いわゆる職員研修)などでの対話を重ねる中で、温かいアドバイスをいただいて、いろいろなことを学ぶことができ、また関わり合うことの楽しさを感じるようになりました。この場をお借りして教職大学院の先生方に心からお

礼を申し上げます。識見と人格を備えた方ばかりで、何より人間的魅力に満ちたスタッフの先生方、5年間大変お世話になりました。

この連合教職大学院を退任するにあたって、今一番感じていることは、「ここには、これからの教育の展望と希望がある」ということです。

まず、院生の皆さんは教育への情熱、真摯さ、夢、思いや願い、実践のバイタリティなど、素晴らしいものを持っておられます。皆さんがこれからの教育に確かな展望と情熱を持って活躍されることこそが希望です。一つだけお願いするとすれば、校内の先生方一人ひとり、内なる思いを持って働いています。その思いを出し合える、語り合える、相互理解し合える学校コミュニティを構築していただきたいということです。そうすれば、もっともっと教育という仕事に前向きになったり、やりがいを感じられたりすると思います。勇気や元気、所属感などが高まるはずですよ。学校改革マネジメントコースの皆さん、特によろしくをお願いします。院生の皆さんの今後ますますのご活躍を心からお祈りいたします。

次に、私が言うまでもないことですが、この連合教職大学院はまさに「これからの教育の展望と希望」を有し、日本だけでなく、世界の国々の教育をリードすべく先頭を走っています。NITSの教師の学びもこの教職大学院の考え方、やり方をモデルにしています。各学校・園での校内、園内研修の在り方や先生方の主体的な学びについても、次々と新たな実践が生まれてきていて、教職大学院はこのような新たな教育へのチャレンジやその省察などの情報が飛び交う場となっています。まさに展望と希望に満ちた場と言えます。自分もその場に居合わせることができたことは大きな喜びでした。連合教職大学院の今後ますますのご発展を心からお祈りいたします。

私は今後、教育界とは少し違った世界に身を投じて、新たな学びと実践に取り組みたいと思っています。新聞等で皆さんのご活躍を拝見することを楽しみにしています。

これまで本当にありがとうございました。

教職大学院の原点と展望

— 退任の御挨拶に代えて —

元連合教職開発研究科 教授 松田 通彦

福井大学連合教職大学院の教職員並びに院生の皆様、お疲れ様です。今年3月末の退任に当たり、改めて一言御挨拶を申し上げたいと思います。

私は、福井県教育庁退職直後から昨年度末まで、同大学院の教授及び客員教授として長い間勤務させて頂きましたが、この間、皆様と極めてエキサイティングかつスリリングな時間と空間を共有できましたこと、この上なく幸せに思っています。色々とお世話になりまして本当に有難うございました。改めて厚くお礼を申し上げます。

私と教職大学院との関わりは、同大学院が産声を上げて間もない揺籃期というか黎明期に遡りますが、当時は実績の乏しさゆえか、掲げる理念が学校現場にうまく理解してもらえない、入学志願者が集まらない、学部卒の院生が教員採用試験になかなか合格しない等々、ないないづくしの課題が山積みになっていました。松木健一専攻長（当時）と二人三脚で、県内市町教育長や県立学校長を粘り強く訪ね歩いた日々が懐かしく思い起こされます。

翻って、今日の同大学院の理論的・組織的・インフラ的充実と発展のさまを鑑みる時、まさに隔世の感

を禁じ得ません。実践的教師教育の国内外への積極展開、地域コミュニティとの連携・協働、インクルーシブ教育の定位付け等のビジョンは説得力に富み、一方でまた、入学定員充足、現職教員の1年履修プログラムの浸透、ストレートマスターの教採合格者増等、かつての大きな課題が加速度的に克服されつつあります。日々奮闘されている多くの皆様方の御尽力にただただ頭が下がる思いで一杯です。

もとより、去りゆくものが駄弁を弄するのは潔しとしませんが、せめて今少し、私のつぶやきに耳を傾けていただければと、筆を先に進めます。

そもそも論ですが、組織は生きものであり静止していることはあり得ません。ウェンガーも語っているように、コミュニティはいくつかの成長発展段階を経てやがては変容期を迎えます。これは避けられないことですが、問題の核心はむしろその先にあると思っています。つまり、目まぐるしく変容する時代や社会の中にあって変化を拒む組織は弱体化します

が、変化に振り回されその原点を見失うとき組織は衰退するリスクも伴うということでもあります。

裏返せば、変化を繰り返しながら原点を忘れないようにすることこそが極意なのですが、教職大学院の原点とは、協働性と進取の気性（探究心）に支えられた教師教育改革加えて学び合う教師のコミュニティづくりへの終わりなき地道な挑戦であると確信しています。そのためには、常に1人ひとりが脚下照顧を念頭に置き、組織人としてのアイデンティティとミッションを失念することなく、日々、原点回帰しながら省察的实践に取り組む気概を持ち続けることが肝要とのエールを送り続けたいと念じています。誠に口幅ったいラスト・メッセージで恐縮の極みですが御海容下されば幸いです。

結びに、福井大学連合教職大学院の今後益々の御発展と関係各位の御活躍・御健勝を心から御祈念申し上げ、甚だ簡単ですが、退任の御挨拶に代えさせていただきます。有難うございました。



事務連絡

2024年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用				2024.3.28現在							
1	月			1	土	特支ゼミ 13:00~17:30		1	木	夏期集中講座Cycle1b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	
2	火			2	日			2	金		
3	水			3	月			3	土	※それぞれかきいずれか一方に出席	社会教育
4	木			4	火	4系授業		4	日	夏期集中講座Cycle2a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 東京 岐阜 オンライン:Zoom	社会教育
5	金	週間カンファレンス準備会 12:50-14:10 (授業研究・教職専門性開発コース) 入学式 開講式 13:00-15:00 オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom 福井・岐阜 特別支援教育ゼミ ガイダンス		5	水			5	月		社会教育
6	土			6	木			6	火	夏期集中講座Cycle2b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	
7	日			7	金	週間カンファレンス		7	水		中堅研修 第2期
8	月			8	土		授業予備日	8	木	8日: オープンキャンパス	
9	火			9	日			9	金		
10	水	前期授業開始		10	月			10	土		
11	木			11	火	4系授業		11	日	夏期集中講座Cycle3a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	
12	金	週間カンファレンス		12	水			12	月		
13	土			13	木			13	火		
14	日			14	金	週間カンファレンス エジプト研修11Batchここまで	附属公開研究会	14	水	※14~16休業	
15	月			15	土			15	木		
16	火	4系授業(4系免P1年次除く) 13:00-16:45		16	日			16	金		
17	水			17	月	パキスタン研修(~6/21)		17	土		
18	木			18	火	4系授業		18	日	特支ゼミ9:00-16:00	
19	金	週間カンファレンス		19	水			19	月	夏期集中講座Cycle3b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 岐阜 オンライン:Zoom	学生募集ストレート対象 説明会(予定)
20	土	月間合同カンファレンスA 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		20	木			20	火		
21	日			21	金	週間カンファレンス		21	水		
22	月			22	土			22	木		
23	火	4系授業		23	日			23	金		
24	水			24	月			24	土	特支ゼミ 9:00~16:30	
25	木			25	火	4系授業		25	日		
26	金	週間カンファレンス(岐阜参加予定)		26	水			26	月		
27	土	月間合同カンファレンスB 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom		27	木			27	火		
28	日			28	金			28	水		
29	月			29	土			29	木		岐阜PT
30	火			30	日			30	金		
31	水			31	月			31	土		
1	水			1	月			1	日		
2	木			2	火	4系授業		2	月		
3	金	憲法記念日		3	水			3	火		
4	土	みどりの日		4	木			4	水		
5	日	こどもの日		5	金	週間カンファレンス(岐阜参加予定)		5	木		
6	月			6	土	ラウンドテーブル		6	金	推薦入試第1回出願受付開始	
7	火	4系授業		7	日	シンポジウム		7	土		
8	水	月曜授業		8	月			8	日	特支ゼミ13:00-15:00	
9	木			9	火	4系授業		9	月		
10	金	週間カンファレンス		10	水			10	火		
11	土			11	木			11	水		
12	日			12	金	週間カンファレンス		12	木		
13	月			13	土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンサイト会場:福井・小浜・東京 オンライン:Zoom 特支ゼミ 15:00~17:30	社会教育	13	金		
14	火	運営協議会(オンライン) 4系授業		14	日		社会教育	14	土		
15	水			15	月	海の日	社会教育	15	日		
16	木			16	火			16	月	夏期集中講座Cycle3C*(予備日) 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	エジプト研修12Batch (~10/11)
17	金	週間カンファレンス(岐阜参加予定)		17	水			17	火		
18	土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom 特支ゼミ 15:00-17:30		18	木		月曜授業	18	水		
19	日			19	金	事前履修オンライン説明会		19	木		
20	月	エジプト研修11Batch(~6/14)		20	土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00	授業予備日	20	金		
21	火	4系授業		21	日			21	土	第1回推薦入試	
22	水			22	月			22	日		
23	木			23	火		社会教育	23	月		
24	金	週間カンファレンス		24	水		社会教育	24	火		
25	土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom	大学祭	25	木		社会教育 中堅研修第1期	25	水		
26	日		大学祭	26	金		中堅研修第1期	26	木		
27	月			27	土	※それぞれかきいずれか一方に出席	授業予備日	27	金		
28	火	4系授業		28	日	夏期集中講座Cycle1a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 東京 岐阜 オンライン:Zoom		28	土	特支ゼミ 13:00~15:30	
29	水			29	月		NITSコア研修	29	日		
30	木			30	火	夏期集中講座Cycle1b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	授業予備日 NITSコア研 修	30	月		
31	金	週間カンファレンス		31	水		NITSコア研修				

2024年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用 2024.3.28現在											
1	火	後期授業開始 推薦入試第1回合格発表 4系授業		1	日			1	土		
2	水			2	月			2	日	長期実践研究報告会 9:30-12:30	
3	木			3	火	4系授業		3	月		
4	金	週間カンファレンス		4	水			4	火		
5	土		社会教育	5	木			5	水		
6	日		社会教育	6	金	週間カンファレンス		6	木		
7	月		社会教育	7	土	特支ゼミ 13:00~16:30	授業予備日	7	金		
8	火	4系授業	金曜授業 NITSコア研修	8	日			8	土	第1回入試	
9	水		NITSコア研修	9	月			9	日		
10	木		NITSコア研修	10	火	4系授業		10	月	第2回入試出願受付開始	
11	金	週間カンファレンス エジプト研修終了12Batchここまで		11	水			11	火	建国記念の日	
12	土			12	木			12	水		NITSコア研修
13	日			13	金	週間カンファレンス エジプト研修13Batchここまで		13	木		
14	月	スポーツの日		14	土			14	金		
15	火	4系授業	月曜授業	15	日	入試説明会		15	土		
16	水			16	月			16	日		
17	木			17	火	4系授業		17	月		
18	金	週間カンファレンス(岐阜参加)		18	水			18	火		
19	土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom 特支ゼミ 15:00-17:30	社会教育	19	木			19	水	第1回入試合格発表	NITS研修
20	日		社会教育	20	金			20	木		
21	月		社会教育	21	土		授業予備日	21	金	エジプト研修14Batchここまで	入構禁止
22	火	4系授業		22	日			22	土	シンポジウム 12:00-17:40	
23	水	第2回推薦入試出願受付開始		23	月			23	日	長春節(休)	
24	木			24	火			24	月		
25	金	週間カンファレンス		25	水		金曜授業 中堅研修第Ⅲ期	25	火	学部個別試験(前期)	
26	土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom		26	木	冬期集中講座a 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・岐阜・東京(12/26-28) オンライン: Zoom	中堅研修第Ⅲ期	26	水		
27	日			27	金			27	木		
28	月			28	土	予備日		28	金		
29	火	4系授業		29	日			29	土		
30	水			30	月			30	日		
31	木			31	火			31	月		
1	金	週間カンファレンス		1	水			1	土	第2回入試	
2	土		附属幼稚園公開研究会	2	木			2	日	特支ゼミ 9:00~15:30	
3	日	文化の日		3	金			3	月		
4	月			4	土			4	火		
5	火	4系授業	月曜授業	5	日	冬期集中講座b 長期実践研究報告の作成 9:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	4系授業	5	水		
6	水			6	月			6	木		
7	木			7	火			7	日		
8	金	週間カンファレンス		8	水			8	月		
9	土	第2回推薦入試		9	木			9	火		
10	日			10	金	週間カンファレンス		10	水	学部個別試験(後期)	
11	月			11	土	予備日 長期実践研究報告の作成 (予備日)9:30-17:00		11	木	運営協議会(オンライン) 入試合格発表	
12	火	4系授業		12	日			12	水		
13	水			13	月			13	木		
14	木		NITSコア研修	14	火	4系授業	月曜授業	14	日		
15	金	週間カンファレンス		15	水			15	月		
16	土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井 小浜 オンライン: Zoom (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-) 東京サテライトRT		16	木			16	火		
17	日			17	金	週間カンファレンス		17	水		
18	月	エジプト研修13Batch(~12/13)		18	土	大学入学共通テスト		18	木	春分の日	
19	火			19	日	大学入学共通テスト		19	水		
20	水			20	月	第1回入試出願受付開始		20	木		
21	木			21	火	4系授業		21	金		
22	金	週間カンファレンス(岐阜参加) 第2回推薦入試合格発表		22	水		附属特支 授業公開	22	土		
23	土	勤労感謝の日 月間合同カンファレンスB 文京 9:30-14:00 (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-)		23	木			23	日		
24	日			24	金	週間カンファレンス	附属特支 公開研究会	24	月	学位記授与式 学位記伝達式 18:00-20:00	
25	月			25	土		岐阜RT	25	火		
26	火	4系授業		26	日			26	水		
27	水			27	月	エジプト研修14Batch(~2/21)		27	木	インターンシップ説明会	
28	木			28	火	4系授業		28	金		
29	金	週間カンファレンス		29	水		授業予備日	29	土		
30	土		授業予備日	30	木			30	日		
31	日			31	金	長期実践研究報告締め切り 週間カンファレンス		31	月		

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】2024 年度が始まりました。3 月に 55 名の院生が無事に修了され、4 月には 66 名を迎えることになりました。また、今年度から教職大学院の連合には、奈良女子大学に代わって富山国際大学を迎えるという新たな節目のスタートになります。今年度の Newsletter も院生の寄稿だけでなく、読者の皆様の寄稿もいただきながら、多くの協働の下で発行をしていけたらと考えております。本教職大学院も皆様と共に学びを深めていく協働探究の歩みを大切にしていけたらと思います。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。（2024 年度 Newsletter 担当一同）

教職大学院 Newsletter No.181

2024.4.15 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp